開会挨拶（趣旨説明）

名古屋大学大学文書資料室長　鮎　京　正　訓

皆さまにはお忙しいなか、第二回名古屋大学大学文書資料室シンポジウム「今、なぜ大学史か――その意義と展望――」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。

大学文書資料室では、昨年二月に第一回のシンポジウムとして、「東海大地震からアーカイブズをどう守るべきか――震災への保存と地域連携を考える――」を、本学の減災連携研究センターとの共催で開催いたしました。そこでは、民間に所在する歴史資料を、いつ起こってもおかしくないとされる南海トラフ巨大地震からどのように守り、後世に伝えていくべきか、活発な議論がおこなわれました。

そしてこのたびの第二回シンポジウムでは、「大学史」をテーマに取り上げました。これにつきましては、本年の四月に私ども大学文書資料室が改組をおこなったことが大きく関係しております。

つまり本学のアーカイブズである大学文書資料室は、この改組により、歴史資料・大学史編纂部門と歴史公文書部門という、二つの部門から構成されることになりました。しかも、これまでは学内共同教育研究施設という小さいながらも独立した部局であったものを、理事を室長とする大学本部直属の運営支援組織に位置づけなおしました。

このような改組をおこないましたのは、一つには、歴史公文書部門を設けたことからも分かりますように、平成二三年に施行された公文書管理法への対応という側面があります。しかし、それだけではありません。

改組をおこないましたもう一つの目的は、大学史の編纂事業を、学術的な事業にとどまらない、大学運営の重要な一環として位置づけていくことにありました。これは、歴史資料・大学史編纂部門の部門長を、総長補佐に任じたことからも分かるところです。本学は、昭和一四年、一九三九年に名古屋帝国大学として創立され、本年で七五周年を迎えました。二五年前の創立五〇周年の際には、四冊からなる『名古屋大学五十年史』を刊行いたしました。大学文書資料室が、次の大がかりな年史になるであろう百年史に向けて、それに必要な歴史資料を収集していくこ

とを重要な任務としていることは言うをまちません。

ただ、最近の大学運営における「大学史」の位置づけは、それにとどまらないものがあります。自校史教育や展示、さまざまな刊行物の製作など、大学の歴史を学内・学外に積極的に公表し、常にアピールし続けていくことが求められています。私立大学では、こうしたことが比較的以前からおこなわれていたようですが、一〇年前に法人化した国立大学でもこのような活動が求められ、アーカイブズが中心となって、積極的な取り組みをおこなっている大学が出てまいりました。

本学でも、大学文書資料室を中心に、これまでにも「大学史」に関わる取り組みをおこなってまいりました。今回は、さらに他大学の先進的な活動に学び、また他大学との連携を深めつつ、本学のみならず、日本の大学のよりよい発展に結びつけてまいりたいと考えております。そのため、このシンポジウムでは、長く日本の大学史研究の第一人者でいらっしゃる寺崎昌男先生、今まさに日本の大学アーカイブズを牽引していらっしゃる京都大学大学文書館の西山伸先生など、当代を代表する顔ぶれをパネリストにお迎えいたしました。会場の皆さまにもぜひご参加いただいて、活発な議論がおこなわれることを期待いたします。このシンポジウムが、「大学史」に関わる活動の意義をあらためて問い直し、これからの展望を切り開く場になることを願って、挨拶に代えさせていただきます。